Osaka University Knowledge Archive

Title	2017年度　意匠学会論文賞選考結果報告
Author(s)	面矢, 慎介
Citation	デザイン理論. 2018, 72, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70561
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

2017年度　意匠学会論文賞選考結果報告

2017年度学会賞選考委員会
委員長　面　矢　慎　介

受賞論文

牧田　久美氏

「戦後日本繊維産業復興期における GHQ のデザイン育成政策：絹輸出貿易における販売促進企画を中心に」

南　有里子氏

「官展の美術工芸部門における漆芸平面作品について：昭和戦前期の山崎覚太郎の活動を中心に」

受賞理由

牧田氏の受賞論文「戦後日本繊維産業復興期における GHQ のデザイン育成政策：絹輸出貿易における販売促進企画を中心に」は，伝統的キモノ図案から西欧風プリント服地図案への移行期にあって GHQ が直接そのデザイン育成に関与していた歴史的事実を検証したものである。牧田氏は，ESS（GHQ の経済科学局）その他の販売促進計画や関連文書を渉猟することによって，当時の絹織物輸出のために日本の図案家と GHQ（ESS）がどのような接点を持ったかまでを追求している。特に後の日本のテキスタイルデザインに深く影響した『染織図案サンプルブック』の編纂に注目し，極少部数が制作され海外の数国に送られたものの現在実物を確認することができないこのサンプルブックについて，その編纂過程と GHQ の関与を関連文書から考証している。海外市場を熟知した ESS 側の取捨選択やアドバイスがどのようになされたかを推定するとともに，サンプルブック編纂を契機として結成された「日本染織図案家連盟」がその後果たした役割にも言及している。

本論文はこれまで明らかでなかった戦後復興期の歴史的事実を，様々な文書資料（GHQ 指令やアメリカ公文書館での調査を含む）を駆使して再構成することに成功している。当該期の輸出向け染織図案に関する多くの知見を含み，意匠学会論文賞として顕彰するに価する。

南氏の受賞論文「官展の美術工芸部門における漆芸平面作品について：昭和戦前期の山崎覚太郎の活動を中心に」は，文部省系列の官展の漆芸分野においてどのように平面作品

が登場しそれが定着したのかを，当時の展覧会規定や図録等の文献資料と出品作品の分析を通して考察したものである。本論文で南氏は，平面作品という新たな作品形式に先鞭をつけた漆芸家・山崎覚太郎の活動（「无型」および「実在工芸美術会」への参加）に注目し，さらに帝展・日展に出品された平面作品数の推移を示してこの変化を具体的に検証している。最後に南氏は「帝展に第四部が新設された直後の漆芸作品分野において新たな形式の平面作品への先鞭をつけた点にこそ，山崎の功績は大きかった」とし，「官展の漆芸における純粋な「絵画性」の追求は戦後，かつて山崎の提示した形式が定着する頃に始まった」と論を結んでいる。

本論文は実用調度品である「屏風」や「衝立」から，「パネル」という形式の定着までの漆芸作品の「形式」の変容がきわめて明解に論じられ，工芸史はもちろん工芸史専門外の会員にとっても有用な知見が得られる好論文である。意匠学会論文賞として顕彰するに価する。

選考経緯

本論文賞は『デザイン理論』70号，71号掲載の学術論文７編を対象とした。本年度選考委員は天貝義教，末包伸吾，吉田雅子，並木誠士の各氏と面矢慎介であるが，並木委員は選考を辞退された（対象論文中の複数の論文指導に関わっていたため）。

選考方法は昨年度までと同様で，各委員がそれぞれ上位５編の論文を選び，１位から５位までを順位付けし，これを１位５点，２位４点，３位３点，４位２点，５位１点と点数化し集計した。その結果，牧田論文と南論文の２編が同点で最高点となり，各委員の順位付けでも全く同等であった。このため，この２編を同時授賞候補として2018年４月の第１回役員会に報告し承認を得た。